

### 13. 強迫性障害の注意実行機能と全般性記憶の関連サブタイプ別の検討

○大森一郎, 仲秋秀太郎, 村田佳江, 古川壽亮 (名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学), 佐々木 恵 (国立長寿医療センター研究所)

【目的】強迫性障害 (OCD) の認知機能障害をサブタイプ毎に検討した。

【対象と方法】OCD 外来患者, 確認群 27 名, 洗浄群 26 名. 記憶検査 (WMS-R), 注意実行機能検査 (Stroop テスト, トレールメイキングテスト; TMT, GO/NO GO 課題, Category fluency; CF, Letter fluency; LF, 符号問題, ウィスコンシンカード検査; WCST, 二重課題) を施行. 結果を因子分析し各因子と記憶の関連をサブタイプ毎に検討.

【結果】3 因子構造を得た. 第 1 因子は Stroop テスト, GO/NO GO 課題, TMT で, 第 2 因子は CF, LF, 符号問題で, 第 3 因子は WCST, 二重課題で負荷量が高かった. 両群間で第 1, 第 2 因子得点に有意差を認めた. 確認群では全般性記憶と第 1 因子得点が相関していた.

【結論】サブタイプ毎に認知機能障害の特徴が異なることは症状に関わる脳部位がサブタイプ毎に異なる可能性を示唆する.

### 14. 診断支援システム VSRAD が有用であった早期アルツハイマー型認知症の一例

○内之倉陽子, 竹林淳和, 河合正好, 森則夫 (浜松医科大学精神神経科)

【はじめに】アルツハイマー型認知症 (AD) は多彩な認知機能障害のために, 社会的機能の著しい障害を引き起こす疾患である. しかしながら, 認知機能障害が現れる前のアルツハイマー病の前駆期では診断が困難である. 今回, 我々は早期 AD 診断支援システム VSRAD (Voxel-based Specific Regional analysis system for Alzheimer's Disease) が診断に有用であった早期 AD の症例を経験したので報告する.

【症例】71 歳, 女性. X-3 年より易怒性が出現し, 次第に家族への暴言等が目立つようになった. X 年 3 月頃より記憶障害, 理解力の低下が疑われ, 同年 10 月, 当院に入院となった. 臨床症状は診断基準を十分に満たさず, 入院時の HDS-R は 27 点であった. 頭部 MRI 上, 皮質全体に中等度の萎縮を認め, 脳血流 SPECT では頭頂葉および側頭葉に血流低下を認めた. VSRAD を施行したところ, アルツハイマー病の初期より特異的に灰白質容積が減少することが知られている海馬傍回に顕著な萎縮を認めた. このため早期 AD

を強く疑い薬物療法を開始し, 易怒性などの著明な改善が得られた.

【考察】VSRAD は早期 AD の積極的治療を行うための診断補助として有用性が高いと考えられる.

## 第 110 回北海道精神神経学会

日時: 2006 年 12 月 10 日 (日) 午前 10 時

場所: 北海道大学学術交流会館

会長: 千葉 茂 (旭川医科大学精神医学講座)

### 1. 先天性血小板減少性紫斑病による症状精神病の一例

○山本浩貴, 長栄 洋, 池田官司, 齋藤利和 (札幌医科大学医学部神経精神科)

血栓性血小板減少性紫斑病 (thrombotic thrombocytopenic purpura; TTP) は, 血小板減少症, 溶血性貧血, 腎機能障害, 発熱, 動揺する精神神経症状を呈する全身性疾患である. 病因は, 止血因子である血漿 von Willebrand 因子の機能異常であり, 多くは後天性に生じるまれな疾患である.

今回我々は, 動揺性の精神症状を呈した先天性 TTP の一例を経験したので報告した. 本症例における精神症状は, これまでの後天性 TTP で報告されている精神症状と矛盾しなかったが, 内科的な安定を反映する検査結果と, 精神症状の間に相関が認められなかった. 先天性 TTP に特徴的な精神症状に関して今後の知見の集積が期待される.

TTP は, 昨今の内科的診断・治療の進歩により, 予後が著しく改善している. 今後, 精神科に関わる機会も増える可能性があり注意が必要である.

### 2. 慢性硬膜下血腫急性増悪を繰り返した双極性障害の一例

○白居礼子, 細川嘉之, 土田正一郎, 高田秀樹 (俱知安厚生病院精神神経科)

臨床上, 精神科病棟では転倒などの頭部外傷機転が生じ易く, また新たに生じた神経症状が精神症状と判別しにくいことがある. 今回我々は, 慢性硬膜下血腫の急性増悪を繰り返した双極性障害の一例を報告する. 症例は 56 歳, 男性. 激しい希死念慮を呈し入院. 入院後自ら壁に頭をぶつける行為により受傷, 以後慢性硬膜下血腫を繰り返し, 2 度に及び手術を受けた. 経過中, 血腫による症状と精神病による症状が常に混在した. また慢性硬膜下血腫の再発危険因子を認めないにもかかわらず, 再発を繰り返したことは, 双極性障害においても潜在的な脳の脆弱性が存在すると考えら

れ、症状を観察する際、その脆弱性をも十分加味しなければならぬと思われた。

### 3. 傍腫瘍性辺縁系脳炎の一例

○渡邊公彦, 大塚 宏, 富永英俊, 古瀬勉 (旭川赤十字病院精神神経科)

症例は58歳女性。家族歴、精神科既往歴はない。肺小細胞癌で内科に入院中に、せん妄状態を呈し精神科へ依頼があった。見当識障害、記憶力障害が急速に進行し、気分の変動や徘徊を認めた。器質的原因検索のため各種検査を行った。採血では異常所見なし、髄液ではリンパ球優位の細胞数増加を認めたがウイルス抗体価は陰性で、転移の所見はなかった。頭部MRI (FLAIR) にて両側海馬領域に高信号を認め、傍腫瘍性辺縁系脳炎と診断した。精神症状が安定しないため精神科病棟にて抗精神病薬による鎮静を行った。睡眠は得られ徘徊は改善されたが、見当識障害や記憶力障害は不変であった。現疾患による衰弱のため再び内科病棟へ転棟した。精神疾患と辺縁系の関連は深く、辺縁系脳炎が呈する多彩な症状のため本症例のように精神科領域でも遭遇する可能性があると考えられた。

### 4. アルツハイマー型認知症における塩酸ドネペジル投与前後の局所脳血流量について

○館農 勝, 内海久美子, 小林清樹, 成田学, 寺岡政敏 (砂川市立病院精神神経科), 高橋 明 (砂川市立病院脳神経外科), 森井秀俊, 藤井一輝 (砂川市立病院放射線科), 齊藤正樹 (九州医療センター脳血管内科), 安村修一 (上砂川町立診療所)

3DSRTを用いて、アルツハイマー型認知症 (AD) における塩酸ドネペジル (DPZ) の局所脳血流量に対する作用について解析を行った。対象は軽度および中等度のAD 15例 (平均77.1歳) で、約一年の間隔でDPZ内服前後の局所脳血流量を定量した。左側頭を除くほぼ全領域で血流増加を認めたが、レンズ核での増加が最大であった。HDS-Rの総得点の変化と血流増加との相関は見られなかったが、早期から血流が低下する帯状回を含む脳梁周囲で血流が増加した事、記憶改善群で右海馬の血流増加を認めた事などから、DPZの認知症状抑制効果との関連が示唆された。

### 5. オランザピン口腔内崩壊錠への変更によって代謝機能に変化が生ずるか

○上村恵一, 高橋義人, 山本 晋, 野田実希, 森 清, 安田素次 (市立札幌病院静療院)

オランザピンは、新規抗精神病薬として、統合失調

症の急性期・慢性期における第1選択薬剤とされている一方で、肥満に關与する有害作用が数多く報告されているが、その剤型間での差異についての研究は少ない。市立札幌病院静療院において、統合失調症入院患者11名において、オランザピン錠の剤型による体重増加、代謝機能の差異を検討することとした。なお本研究の主旨については、全例口頭にて同意を得た。オランザピン普通錠を、同用量の口腔内崩壊錠に変更した日をベースラインとし、変更4週、8週、12週、24週後に体重増加、代謝機能を測定した。12週後、24週後の体脂肪率、24週後の血清中性脂肪濃度、12週後、24週後の売店での食品購入金額はベースラインに比べて有意に減少した。オランザピンによる代謝機能異常は、特に体脂肪率増加と血清中性脂肪濃度増加について普通錠に比べて口腔内崩壊錠においてより軽微な可能性がある。

### 6. オランザピン口腔内崩壊錠の体重に対する影響

○古川晶子, 伊藤耕一, 新田信幸, 甲野智也, 藤江委子, 松原良次 (札幌花園病院)

オランザピン錠で治療を受けている患者の問題点として体重増加や耐糖能異常、高脂血症があげられる。オランザピン錠とオランザピン口腔内崩壊錠 (OLZ-ODT) では体重増加に対する影響に違いが見られるという報告がある。今回我々は、OLZ-ODTが入院患者21名の体重に与える影響を調査した。8週間後まで計測できた19名では、投与前と比較して体重に有意な変化はなかった。24週間後ないし観察終了時では、7%以上の体重増加を示したのは4名 (19%) であった。体重増加群は年齢が低い、罹病期間が短い、併用抗精神病薬が少ない、GAF改善度、CGI改善度が大きい傾向があった。入院下で栄養、運動管理がなされると体重増加が抑制されると考えられた。剤型の違いについては今後検討が必要である。

### 7. 思春期の統合失調症に対してアリピプラゾールを使用し奏功した二例

○新出泰士, 中島幸治 (八雲総合病院精神神経科)

心身の発達段階にある思春期患者の治療に関しては成人と比較して、より有害事象を慎重に検討した薬物の選択や特別な心理的配慮が必要であると考えられる。2006年より本邦においてもアリピプラゾールが使用可能となり、アメリカ精神医学会のガイドラインにおいても副作用の少ない抗精神病薬と指摘されている。今回我々は思春期に発症した統合失調症において、これまでの抗精神病薬による治療では過鎮静、体重増加等の副作用を呈した2症例に対し、アリピプラゾール

を使用し奏功した2例を経験した。今回の2例においてアリピプラゾールによる治療は副作用の面からアドヒアランス獲得に有効であると考えられた。

#### 8. 当院におけるアリピプラゾールの使用経験例

○武重宏呂修, 矢上勝義, 岡崎大介, 加藤一郎, 本田 稔, 中村一朗, 佐々木信一 (北海道立向陽ヶ丘病院)

北海道立向陽ヶ丘病院においてアリピプラゾールを使用した症例で, その有効性と安全性について診療録に基づいて後方視的に調査し検討した。統合失調症の患者24症例はいずれも再発例で, 内服後2週間でBPRS陽性症状スケールに有意な改善が得られた。出現した主な副作用は不眠, アカシジアであったが, 対処により副作用が発生した患者の90%は内服継続が可能であった。調査期間中の体重の平均値に有意な変化はなく, 耐糖能異常の出現も認められなかった。アリピプラゾールは統合失調症再発例に有効であり, かつ副作用の程度・対処のしやすさから, 患者のコンプライアンス, アドヒアランス向上に期待が持てる抗精神病薬と考えられた。

#### 9. バルプロ酸服用中でのてんかん患者における体重変化の検討

○岩田愛雄, 栗田紹子, 武田洋司, 櫻井高太郎, 本間次郎, 小山 司 (北海道大学精神科神経科)

バルプロ酸(VPA)の副作用の一つである肥満は, 冠動脈疾患, 糖尿病, 高血圧等の危険因子である。どの程度の体重増加が生じるのか, またその予測因子の有無を調べるため, 以下の調査を行った。

当科にてんかんで通院歴のある患者(1592名)のうち, VPA内服歴のある患者(466名)のカルテを後方視的に調査し, 他疾患・薬剤による体重変化の可能性を除外可能で13歳以上, かつ服薬開始時と1年後の体重・身長がフォロー可能な42名について検討を行った。服薬前後のBMIの変化を調べた結果, 平均1.16増加していた。各臨床パラメータとの相関を調べた結果, 性別, VPA投与量, 血中濃度などとは相関が認められなかった一方で, 服薬開始年齢が若い群, また他の抗てんかん薬を併用しない群で, 有意な増加を認めた。

#### 10. パニック発作との鑑別に苦慮した interdose rebound anxiety の一症例

○山川友子, 橋本恵理, 池田官司, 齋藤利和 (札幌医科大学神経精神科)

現在, BZD系抗不安薬は, 効果発現が早く安全性の高い薬剤として繁用されている一方で, その使用に

際しては, interdose rebound anxiety (服薬間反跳性不安), 常用量依存, 離脱症状などの弊害への注意が必要である。今回, 我々は, パニック発作を合併したうつ病の患者の治療において発生した interdose rebound anxiety に対して, パニック発作との鑑別に苦慮し, BZDを減量すべき時点でBZDや抗うつ剤を増量するという不適切な対処を行った結果, BZD依存の増悪を招き治療を長期化させた症例を経験した。interdose rebound anxietyと疾病本来の不安との鑑別, BZD依存への対処, 等について若干の考察を交えて報告した。

#### 11. 抗精神病薬多剤併用大量投与患者の減薬について——自験例をふまえて——

○藤井 泰, 三上昭廣 (函館渡辺病院)

抗精神病薬多剤併用大量投与は, 患者のQOLを改善しないばかりか, 認知機能を障害し陰性症状を悪化させると言われている。新規抗精神病薬への単剤化が推奨されているが, 単剤化前にクロロプロマジン換算2000mgあるいは1500mg/day以下までの減量が必要であり, 単剤化に至る前の減量, 減薬に対する安全なプロトコルは存在しない。

長期大量投与により重篤な副作用が生じており, かつ長期間, 臨床症状の変化の見られない統合失調症患者に, 減量, 減薬を試みた症例2例について報告した。

有用性の根拠がない場合, 副作用の観点から減量, 減薬が望ましく, 減量速度に関しては, 再燃, 離脱の可能性も考慮し, 慎重に減量をすすめることが重要と考えられた。

#### 12. 心理行動学的症状に対する抑肝散の効果

○小林清樹, 内海久美子, 館農 勝, 寺岡政敏 (砂川市立病院精神神経科)

【はじめに】抑肝散は, 認知症患者の心理行動学的症状の治療として, 効果のある薬剤であると近年報告されてきている。当科では, さらに, 非認知症患者のせん妄に対しても処方してみた。今回我々は, 心理行動学的症状に対する抑肝散の効果について検討した。

【対象】認知症患者45例と認知症がないせん妄患者7例の計52例。

【方法】心理行動学的症状の評価に, Neuropsychiatric Inventory (NPI) を用い, 対象患者の抑肝散投与前後のNPIスコアについて, t検定を用いて解析した。

【結果】抑肝散投与により, 認知症患者の妄想, 幻覚, 興奮/攻撃性, 焦燥感/被刺激性, 睡眠障害の項目が有意に改善。認知症がないせん妄患者の興奮/攻撃性, 睡眠障害の項目が有意に改善。

【考察・まとめ】最近の報告通り、抑肝散は認知症患者の心理行動学的症状に対して有効であった。非認知症患者のせん妄に対しても有効性が示された。

### 13. 修正型電気けいれん療法 (mECT) 施行時に使用した筋弛緩薬サクシニルコリンによる悪性高熱症が疑われた統合失調症の1例

○古堅祐行, 伊藤侯輝, 橋本直樹, 松山哲晃, 村下真理, 安部川智浩, 久住一郎, 小山 司 (北海道大学精神科神経科)

ECTは、現在では統合失調症やうつ病などに対する主要な治療手段の一つとなり、ECTに静脈麻酔薬や筋弛緩薬などによる管理を併用したmECTが普及しその安全性が確立されてきている。しかし、一方でmECT施行時の使用薬剤を原因とした悪性高熱症などの重篤な副作用の出現には十分な注意が必要である。今回は、mECT施行時に使用したサクシニルコリンによって、急速に上昇する高度の発熱が誘発されたと考えられた統合失調症の1例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

### 14. 修正電気けいれん療法施行症例の近況と定期的維持例の検討

○古根 高, 中島公博, 小野澤淳, 鈴木健史, 坂岡ウメ子, 千丈雅徳 (五稜会病院)

平成16年当学会での報告に続き、その後2年間の当院における修正電気けいれん療法(以下、m-ECT)施行症例を検討した。延べ41症例にm-ECTを施行し、効果判定可能な38症例を検討対象とした。その結果、9割近くの有効例を認め、著効例も3割近くに達した。特に、緊張・昏迷状態では著効例が5割近くに達した。その中に遅発性・悪性緊張病の病像を呈した症例を認めた。m-ECTが著効を示したが、経過中に緊張病状態が繰り返されたため、定期的にm-ECTを施行することでその予防効果を期待した。まだ5ヶ月間の経過ではあるが、4~5週間隔に1回のm-ECTを外来で施行する維持療法を行い、現在は抗精神病薬を服用することもなく安定している。

### 15. 60歳以上の単極性うつ病患者に対するmECTについての検討

○廣田正志, 吉田尚子, 朴 秀賢, 本間裕士, 岩崎俊司, 松原繁廣 (国立病院機構帯広病院精神科神経科), 山岸昭夫, 朝井裕一 (国立病院機構帯広病院麻酔科)

60歳以上の単極性うつ病患者11例(男性3例, 女性8例)に対するmECTの安全性と有効性に関して検討した。循環器疾患(6例, 54%)をはじめとして8例(73%)が何らかの身体疾患を合併していたが、

中等症以上の有害事象を認めず安全に施行できた。HAM-Dで7点以下を寛解、50%以上の減少を有効として、短期的成績は、治療終了早期の寛解率75%、有効率100%と良好であった。また、中期的成績は、6ヶ月以上経過観察できた8例の中期寛解率は75%と良好であり、高齢者では中期的にも再燃が少ない可能性が示唆された。高齢うつ病患者においては治療を長期化させないためにも早期のmECTの導入を検討すべきと考えられた。

### 16. 大うつ病性障害における自殺既遂例の特徴および治療的介入の検討

○三井信幸, 工藤 浩, 黒河泰夫 (岩見沢市立総合病院精神神経科)

昭和63年から平成17年までに岩見沢市立総合病院を受診し、初診時に大うつ病性障害の診断基準を満たし、その後自殺既遂に至った症例18例について検討した。また、初診時に自殺念慮を示した症例を対照群として症例対照研究を行った。自殺既遂例は男性8例, 女性10例であり、男性は20~50歳代に、女性は30~70歳代に分布した。また既婚者や家族と同居していた症例が多かった。さらに初診時に自殺念慮を示さなかった自殺既遂例は、自殺念慮を示した自殺既遂例より早期に自殺既遂に至っていた。症例対照研究では、初診後1ヶ月間の治療的介入について比較検討した。その結果、自殺念慮群の方に入院症例が多く、抗うつ薬の投与量も有意に多かった。初診後の評価と十分な治療的介入が重要と考えられた。

### 17. 児童・青年期のうつ病性障害における新規抗うつ薬(SSRI, SNRI)による情動変化および自殺関連事象の臨床的研究

○清水祐輔, 山中啓義, 賀古勇輝, 北川信樹, 傳田健三, 小山 司 (北海道大学精神科神経科)

17歳以下の大うつ病性障害71例における抗うつ薬による情動変化および自殺関連事象の病態を検討した。その結果18例が情動変化を呈し、その病態は①ジッタリネス症候群3例, ②投与直後・増量直後の躁状態・混合状態3例, ③うつ病の悪化1例, ④緩徐な経過による典型的な躁転5例, ⑤元来の性格または併存疾患の影響6例であった。うち①, ②, ③の事象では情動変化に抗うつ薬の強い影響が疑われた。18例中13例で何らかの自殺関連事象を認め、うちコロビアの自殺関連事象の分類での自殺行動/念慮の可能性は6例, 自殺行動/念慮は2例であった。検討の結果、いわゆるactivation syndromeの本態は、主に①ジッタリネス症候群と②投与直後・増量直後の躁状態・混

合状態であると考えられた。

### 18. 広汎性発達障害 (PDD) の人物画

○猪師由郁子, 澤田信也, 別府隆一郎, 橋本省吾, 中野育子, 築島 健 (札幌市精神保健福祉センター)

PDDと診断され, WAIS-R 知能検査で普通知全検査 IQ が 80 以上 50 名を対象に Goodenough の人物画知能検査 (DAM) を用い, 描画特徴について定量的に検討した。全対象者の DAM 得点の平均得点は 22.3 (SD±11.1), MA は 7 歳 3 ヶ月と WAIS-R で示された IQ と比べて著しく低いことが示された。通過率が通常とは異なり, PDD の認知特性がうかがわれる結果であった。DAM で示される精神年齢は WAIS-R で示される IQ とは異なった社会性や対人的な側面を反映する可能性があると考えられる。

### 19. スクールカウンセラー (SC) と医療機関との連携

○手代木紘子, 小笠原雅美, 長谷川有子, 向 裕加, 米田 舞, 山田真吾, 齋藤諭, 齋藤利和 (札幌医科大学神経精神科)

札幌市の SC 活用事業は平成 7 年からはじまり, 現在, 札幌市内の全中学校と一部小学校, 高校に SC が配置されている。発表者の勤務する 3 つの学校の, 相談室に入室した生徒の中で, 医療機関を受診している生徒は 1~4 割おり, 地域性や, 教職員, 保護者の意識により, 受診率にひらきがある印象がある。通院している生徒の診断は, 神経症性障害, 発達障害が多い。今回の発表では, 3 つの事例の報告をとおして, 学校において, SC が生徒, 保護者, 教職員, 医療機関などから得た情報を集約し, それぞれのコミュニケーションをサポートしていくことで, 円滑な連携につながることを示唆された。

### 20. 当院思春期外来における診療統計——1996 年~2005 年の 10 年間の資料——

○宮崎健祐, 武井 明, 目良和彦, 佐藤讓, 原岡陽一 (市立旭川病院精神科)

過去 10 年間に当科の思春期外来を初診した 18 歳以下の児童・思春期患者の外来統計を集計した。児童・思春期患者数は 1032 名 (男 392 名, 女 640 名) で, 当科の新患全体の 15.5% を占めていた。患者数は年々増加し, 特に 2004 年からは急増していた。12 歳~18 歳までの思春期患者が 86.3% を占め, 紹介患者が全体の 42.2% であり, 学校からの紹介が著しく増えていた。診断的内訳では, 神経症性障害 (F4) が 49.5% で最も多く, 不登校の中高生の増加が神経症性障害を高い割合に引き上げていた。また, この 5 年

間では注意欠陥多動性障害とアスペルガー症候群の増加が目立っていた。今後, 診療体制の充実のために, 児童思春期精神科医療の専門医を養成することが急務であると考えられた。

### 21. 伊達市における精神遅滞者と向精神薬の使用状況

○渡邊一平, 早川 透 (伊達赤十字病院精神科)

2006 年度に当院が往診を行っている精神遅滞者の施設において協力が得られた総数 360 名の精神遅滞者を対象に年齢, 性別, 精神遅滞の重症度, 居住状況, 合併症などと向精神薬の使用状況を調査した。向精神薬の内服が 23%, 抗てんかん薬のみは 15%, 全体で 38% とこれまでの報告とほぼ同様の割合となった。向精神薬内服者ではてんかん (32%) と施設生活者 (27%) が有意に多くダウン症 (6%) が少なかった。自閉症 (35%) は多いものの有意差を認めるにはいたらなかった。精神遅滞の重症度, 性別, 年齢では有意差は認められなかった。IQ や性別, 重症度などよりも個々の障害の特性を考えて処方することの重要性が示唆された。

### 22. 訪問型個別支援 (遠隔地域型) モデルについて (第 2 報) ——音更リハビリテーションセンターの新たな取り組み——

○中澤 広, 白濱武人, 伊藤勝三 (道立緑ヶ丘病院), 井口洋司, 澤村俊彦, 柴田功, 桶田昌平 (道立緑ヶ丘病院附属音更リハビリテーションセンター)

道立緑ヶ丘病院附属音更リハビリテーションセンターで行っている訪問型個別支援 (遠隔地域型) モデルについて, 平成 18 年 4 月の開始以来の利用状況について報告する。

対象者は平成 18 年 12 月 1 日現在で 18 人。疾患は統合失調症圏が 13 人, 感情病圏が 1 人, 発達障害圏が 3 人, 神経症圏が 1 人となっている。

対象者を医療と障害の視点から想定される分類からすると, ①急性期型 0 人, ②医療中断型 0 人, ③生活障害型 10 人, ④病状不安定型 5 人, ⑤医療・家族支援型 2 人, ⑥閉居型 1 人で, 精神科医療との結びつきがなんとか保たれている③④⑤がほとんどという結果であった。

今後は, 医療中断型・閉居型等の患者を医療に結びつけるためにも, 市町村との連携・協働をさらに, はかって行きたい。

### 23. 精神科初診時における身体的スクリーニング検査の意義

○堀口憲一, 三戸法和, 長尾智美, 仲唐安哉, 立花義浩, 菅原美帆, 浅野 裕 (市立室蘭総合病院精神科神経科)

平成17年4月1日～平成18年11月1日に当科を初診した1274名のうち759名に対して身体的スクリーニング検査(血液検査, 頭部画像検査等)を施行し, その結果について調査した。検査施行した患者の約10%(70名)に治療を要する身体疾患が認められた。身体疾患が判明した70名中, 精神症状と身体症状の関連性があったものは32名, 精神症状から身体疾患を予測することができず, 偶然に異常が発見されたものが38名であった。今回の調査より, 精神科初診時における身体的スクリーニング検査は非常に有用と考えられ, その意義として, ①精神症状からは予想できない身体合併症を発見し適切な治療につなげられる, ②症状性・器質性精神障害の鑑別・治療を確実に行うことができる等の点が考えられた。

### 24. 北海道大学病院精神科神経科における外来患者統計

○神 慶太, 賀古勇輝, 山中啓義, 北川信樹, 傳田健三, 小山 司 (北海道大学精神科神経科)

北海道大学病院精神科神経科外来における1997年4月から2006年9月までの新来患者(10,733人)と, 現在通院中の患者(2006年1月～10月に受診歴のある患者, 3,813人)についてデータベースを作成し, 性別, 年齢, ICD-10診断などを調査した。過去の当科新患の調査(1976～1992年)や他の大学病院との比較も行った。

患者の年代は, 新患では20代, 通院中患者では30代をピークとした。新患においては, F3が28%, F4が22%, F0, F2, F5, G40がそれぞれ10%弱であった。通院中患者においては, F3が31%, G40が21%, F2, F4が各15%を占めていた。新患の年次推移においては, 統合失調症, 神経症が減少, 気分障害, 発達障害, 認知症, せん妄が増加していた。新患の疾患割合に関する他大学との比較においては, 当科はF3, G40が比較的多く, F2, F4が少なかった。

### 25. 市立稚内病院精神科神経科デイケアにおけるアルコール依存症患者の検討

○下鳥紀生, 坂井陽子, 岩田和也, 千秋勉 (市立稚内病院精神科神経科)

平成11年の開院以来, 当科デイケアに通所した全12例を検討した。調査時, 通所者中アルコール依存

症患者数は9人(15%)で, 統合失調症患者数の37人(60%)に次いだ。通所前に比し通所後は全例で, 再入院までの在宅期間が著明に延長するか再入院の回数が著明に減少した。断酒継続8例, 「節酒」4例, うち連続飲酒による再入院をしたのは1例のみであった。アルコール依存症患者はデイケアにほぼ毎回通所する傾向があり, 定期受診, 断酒継続, 在宅生活の継続に効果があることを確認した。その一方で, デイケア卒業や単なる在宅生活以上の「社会復帰」に至るまでの困難さが浮きぼりとなった。生活技能訓練や就職支援などを今後, 更に精力的に行う必要性を指摘した。

### 26. デイケア通所中の統合失調症患者における内服薬と長期予後について

○押部 弘, 吉川憲人, 太田健介, 太田秀造, 太田耕平 (札幌太田病院)

精神科デイケアは心理・社会的療法においての医学的リハビリテーションで中心的な役割を担っているが, 今回我々は当院併設のデイケア3施設とナイトケア2施設に通所中の, ICD-10でF2に分類された統合失調症患者について, 2003年10月から2006年10月までデイケアもしくはナイトケアに継続して通所していた212名(男性139名, 女性73名)の各時点での内服中の抗精神病薬の剤数及び主剤の推移, 同期間内で(再)入院した81名の患者の2003年10月時点で内服中の抗精神病薬の剤数と主剤, 及び剤数別, 主剤別の(再)入院率, 2006年10月時点での継続性抗精神病薬の使用頻度と同期間内の(再)入院率について調査した。

内服中の抗精神病薬の剤数については, 3年間で3剤以上の多剤服用者が減少して2剤服用者が増加していたが, 同期間での単剤化は進展していなかった。主剤については3年間で第一世代抗精神病薬の割合が減少して, 第二世代抗精神病薬, とりわけオランザピンの処方割合が増加していた。(再)入院者において, 3剤以上の多剤服用者の入院率(22%)が単剤(40%), 2剤(44%)に比べて低かった。主剤別の入院率については, 第一世代抗精神病薬(35.8%), リスペリドン(36.5%), オランザピン(38.9%)で大きな差はなかったが, クエチアピンで50%, ペロスピロンで54.5%であった。2006年10月時点での持続性抗精神病薬の使用者数はデカン酸ハロペリドール, デカン酸フルフェナジンの重複使用者3名を含み75名で全体に占める割合は35.8%であった。3年間で(再)入院者は33名で(再)入院者における割合は40.7%で, 全体での(再)入院率38.2%よりも高い数値を示した。

今回得られた調査結果を統計処理するとともに、内服薬の用量、薬価と（再）入院との関係のほか主剤別のリハビリテーション効果について各デイケア施設で行っているLASMIを用いて評価し、まとめる予定である。

#### 27. 復職デイケアの役割と今後の展望について

○横山正幹，横山太範，千葉幹子（さっぽろ駅前クリニック）

現在、多くの企業が長期休職者を抱え、さらに復職がスムーズにできない方も多く存在する。国もその対策（復職ガイドライン）に取り組むようになったが、休職・復職を繰り返す人も少なくない。

それは、従来の復職判定に問題があったと考えられ、医療側と企業側の復職者へ求めるものの大きなギャップがあったからであると考えられる。

「精神科デイケア」が持つ特性は、このギャップを埋めることが可能であり、復職を専門とする「復職デイケア」は必要不可欠な社会資源になり得ると考えた。

今年1月より当院で開始した「復職デイケア」の概要と参加の状況を挙げ、その中から今後の課題を検証する。

#### 28. 産業領域におけるメンタルヘルスケアの実践 ——定期訪問による相談事例を通して——

○小笠原岳洋，石川博基（いしかわ心療・神経クリニック），橋本恵理，齋藤利和（札幌医科大学神経精神科）

当院心理士は産業カウンセラーの資格を有し、当院医師（産業医）の行う産業医活動の一部を担っている。ここに1社での活動を報告する。対象は、コールセンター企業の支店で従業員約250名。厚生労働省指針（2006）を基準に以下を実践している。①訪問は月1回、訪問日に行う安全衛生委員会へ毎回参加（議題によって産業医の回答を伝達）、②産業医の職場巡視に同行、③オペレータ管理者層へのストレス講義（2人/回）と組織ストレスの聴取（1人/回）を順次・定期的、④リハビリ出勤の提言と復職（予定）者に関する管理者層への助言、本人との面談（正社員のみ）、⑤残業過多の正社員との面談、⑥こころの相談箱の設置。開始から約1年、心理士の活動には、直接的な介入による予防効果と産業医の橋渡し役としての意義がある。専門家による援助のニーズは高く、精神科受診前段階での介入も求められている。精神科診療所所属の心理士が、精神科産業医との連携で行う定期訪問を実施している事業所は少ないと考えられるが、今後重要と思われる。